

VI 高齢広葉樹林の萌芽更新技術の確立

(実施期間：平成28年度～令和2年度 予算区分：県単 担当：西信介)

1 目的

里山林の放置による里山広葉樹林の高齢・大径化が進行しており、特にナラ類はナラ枯れ被害が増加する要因ともなっている。ナラ類等の広葉樹はシイタケ原木、床材、木炭等に利用されるほか、近年では木質バイオマス燃料としても注目が高い。

里山のナラ類等については、萌芽能力が高い15～25年生程度で伐採・萌芽更新させていたが、近年の高齢化した広葉樹林伐採跡地では萌芽更新が進みにくく、ヤブ化・ササ山化した山林もみられることから対策が臨まれている。本課題では高齢広葉樹林の更新方法の確立を目的に伐採時期や伐採高等による萌芽率向上を試みる。

2 実施概要

13～90年生のコナラの伐採地で、伐採時期、樹齢、切株の直径、伐採高、萌芽枝の発生位置、本数、樹高等の状況を調査した。その結果、90年生のコナラでも萌芽することを確認できたが、伐採時期により萌芽率が異なり、夏期に伐採すると萌芽率は低く、冬期に伐採した方が萌芽率は高かった。秋期は萌芽率に差があり、紅葉前の9～10月に伐採した場合は萌芽率が低く、落葉後の11月に伐採した方が、萌芽率は高かった。

萌芽から4年後までの状況を追跡調査したところ、切株下部からの萌芽枝の生存率は60%を超えていたが、切株上部では20%で、上部で萌芽した萌芽枝ほど生存率が低かった(図1、図2)。生存率が高い切株下部からの萌芽枝を多く発生させるためには、伐採高をできる限り低くすることが必要で、その目安は25cm以下と思われた(図3)。

3 結果の図表

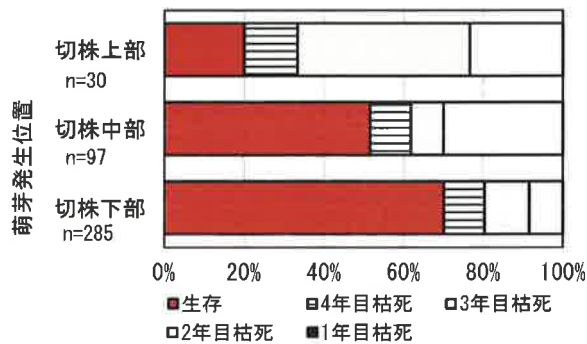


図1 伐採4年後の萌芽枝の生存率

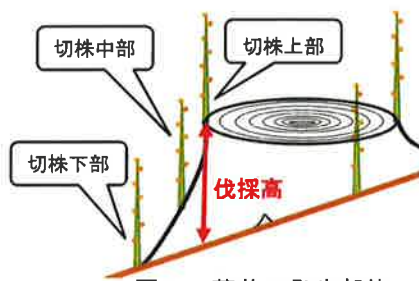


図2 萌芽の発生部位

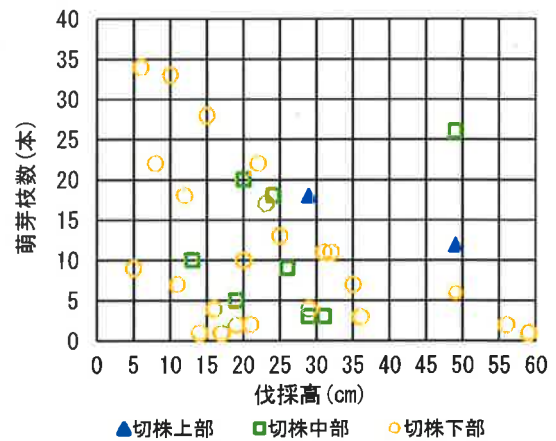


図3 伐採高と萌芽位置と萌芽枝数